

行為間比較を遮る「スーパーヒーロー」としての私 - キネステーズの回復 -

○我妻 郁佳¹⁾ 櫛引 圭介¹⁾

1) 青森新都市病院 リハビリテーション科

【はじめに】

本症例は、過去を介し未来と比較を行う上で「主婦として何でも出来たが故の情動」喚起が行為間比較における類似と差異の検出困難にし、否定も肯定も出来ない状態に陥り、負のキネステーズを認めた。過去と未来を繋げるための訓練行為に、経験ある料理に経験ない要素を加えた調理を用い、主婦のキネステーズ回復を期待し介入した。訓練行為を媒介とした自己意識形成の現れとして「出来そうな気がする」など記述に変化を認めた。キネステーズの回復について以下に報告する。

【症例】

女性。右被殻出血。右利き。左片麻痺Br-stageVI-VI-V、軽度の感覚異常、FIM123。左上肢機能FMA63、ARAT54、STEF95、握力24.8kg。病前は主婦活動全般。

【病態解釈】

訓練行為の予測に際し「できる気がしない」といった言語を使用、近未来への拡がりや遮断されている。行為間の比較が困難で、病前の「何でも出来たスーパーヒーローとしての私」の存在が、「出来なくなってしまった私」との比較の中で情動的要素を喚起し、負のキネステーズが形成している。

【治療アプローチおよび経過】

期待される効果をキネステーズの回復とし、訓練行為を餃子作りに設定。経験ない要素として皮づくりを選択。工程表から行為イメージを想起する際、左手を視覚確認しながら行い、訓練行為への拒絶的な発言が多く見受けられた。訓練行為遂行後の動画確認中「パン作りでやっていたのと似ている」と類似検出あり。「意識しないでやれた、楽にするために工夫してみた」と表出。訓練後の外泊で「色々試してみた。これから何でも出来そう」と表出するようになる。

【考察】

キネステーズの回復は、出来ることを増やすことではなく、出来そうな気がする近未来への拡がりである。経験ある料理に経験ない要素を含んだ訓練行為は、システム変容によって「出来る気がしない」と否定される経験に加え、「行ったことがある」類似性の中で肯定されるという両義的な側面を持つ。肯定も否定も可能な経験となりもう一つの可能性が引き出され、この可能性が「出来そうな気がする」といった自己意識の現れに関与したものである。拡がりの基盤となるキネステーズの回復にとって、過去と現在の行為間比較に加え、経験ある過去と経験ない近未来との比較が重要な役割を果たすと考える。

【倫理的配慮】

本人に十分な説明のうえ、発表の同意を文書で得た。